



銅鐸祭祀からみた弥生社会

野洲町教育委員会文化財保護課
主査 進藤 武

はじめに

銅鐸は集落から発見されることが極めて希で、丘陵の斜面などから単独で発見されることが一般的です。そのため謎の遺物とされ、銅鐸のまつりを具体的に論ずることは難しい問題です。しかし、稲作を生活基盤として歩み始めた弥生時代に近畿地方を中心に集落規模で用いられたさい器であり、その形態や紋様、絵画、製作技術、広がりなどを手掛かりとして、弥生時代各期の畿内と地域社会の動向をつかむうえで、この変化を促えることは有効な手段となります。

銅鐸には裾内面に内面突帯とよぶ帯が巡っており、内面に吊り下げた振り子（舌）がこの帯と接触することによって高い金属音を奏

でるベルで、古段階のものは舌を伴って出土した例があること、内面突帯が磨り減っていることなどから実用レベルとして鳴らされた「聞く銅鐸」として用いられました。古い銅鐸には鐸身を横帯紋で区画する「横帯紋銅鐸」や流水紋を配した「流水紋銅鐸」、縦横の帯で4つに区画する「4区袈裟襷紋銅鐸」があります。その製作には石製鑄型（外型）が用いられ、同じ鑄型で造られた同範（兄弟）銅鐸が存在します。吊り手（鈕）も吊り下げやすい構造をとどめており、吊り手、裾、横帯などに水鳥やシカ、人物などの絵画を描いた銅鐸もあり、主に近畿地方以西の地域に厚く分布しています。

一方、弥生時代中期後半になると土製鑄型



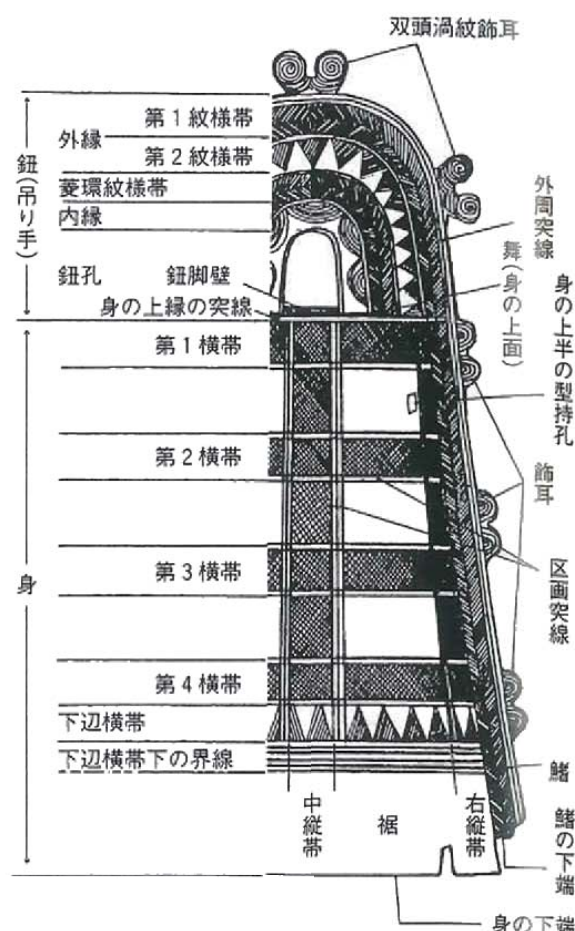
1962年野洲町小篠原大岩山東斜面出土銅鐸一括

が採用され、鐸身を縦横の帯で6つに区画した「6区袈裟襷紋銅鐸」が主流になります。また大型で吊り手や鰭に渦巻模様の飾耳を付け、区画線を突出させた「突線」で表す「見る銅鐸」へと変貌し、主に近畿地方周辺部と東海地方に分厚く分布するようになります。

近江の銅鐸

近江は古段階から新段階まで長期間銅鐸が使用された地域で、表のとおり6遺跡8地点から33個を数え、伝承品を含めると12遺跡39個となります。これらのうち出土地が明らかな銅鐸をみると、古段階の銅鐸は草津市志那町や守山市新庄など湖岸の集落遺跡に近いところから出土し、中・新段階の銅鐸は竜王町山面高塚や大津市石山寺辺、野洲町小篠原大岩山など当時の集落から離れた丘陵部に埋められる傾向が指摘できます。

草津市志那銅鐸は銅鐸の中でも最も小さいものです。守山市新庄銅鐸は4個出土したうち、流水紋銅鐸1個が現存し、脱穀する人物、シカ、トンボ、カエル、カメ、サルなどの絵画のある銅鐸として、また他に同じ鋳型で造られた兄弟の銅鐸が4個存在し、摂津や伯耆などから出土していることで知られています。竜王町山面銅鐸は2個が入れ子で出土し、うち大きい1個は、東海地方の特徴を備えた銅鐸として注目されます。大津市石山寺辺銅鐸は、高さ90cmを越える大型品ですが厚さが3mmに満たない精巧な造りで、吊り手には大きな渦巻紋の飾耳を備えています。小篠原大岩山銅鐸群は、3つの地点から24個が出土しており、丘陵の頂き付近から流水紋銅鐸が1個、東斜面から6区袈裟襴紋銅鐸が9個（うち3個は東海系）、同じく丘陵の東斜面から高さ134.7cmの最大銅鐸を含む6区袈裟襴紋銅鐸が14個出土（うち11個現存、1個は東海系）しています。このように近江の銅鐸には、最も小さい銅鐸から最大の銅鐸まであり、近畿地方と東海地方の銅鐸がともに出土していることなど多くの特徴がみられ、特に大岩山銅



銅鐸の部分名称

出土地	型式	点数	発見年	高さ	備考
1. 草野山遺跡 (大友郡草野町中津江)	弥生前期式Ⅰ式前期土器	1点	1932年頃	12.6cm	舟の土器の片断は5枚、その他土器の破片と土器の口縁に片断等
2. 寺山古墳 (青野郡山崎町寺山)	外葬式Ⅰ式前期土器	4点	1799年	42.3cm	弥生前期式Ⅰ式前期土器、形制は弥生前期Ⅰ式Ⅰ期(450年)より後、Ⅱ期(500年)頃、Ⅲ期(550年)頃、Ⅳ期(600年)頃、Ⅴ期(650年)頃、Ⅵ期(700年)頃、Ⅶ期(750年)頃、Ⅷ期(800年)頃、Ⅸ期(850年)頃、Ⅹ期(900年)頃、Ⅺ期(950年)頃、Ⅻ期(1000年)頃、Ⅼ期(1050年)頃、Ⅽ期(1100年)頃、Ⅾ期(1150年)頃、Ⅿ期(1200年)頃、ⅰ期(1250年)頃、ⅱ期(1300年)頃、ⅲ期(1350年)頃、ⅴ期(1400年)頃、ⅵ期(1450年)頃、ⅶ期(1500年)頃、ⅷ期(1550年)頃、ⅸ期(1600年)頃、ⅹ期(1650年)頃、ⅺ期(1700年)頃、ⅻ期(1750年)頃、ⅼ期(1800年)頃、ⅽ期(1850年)頃、ⅿ期(1900年)頃、ⅿ期(1950年)頃、ⅿ期(2000年)頃、ⅿ期(2050年)頃、ⅿ期(2100年)頃、ⅿ期(2150年)頃、ⅿ期(2200年)頃、ⅿ期(2250年)頃、ⅿ期(2300年)頃、ⅿ期(2350年)頃、ⅿ期(2400年)頃、ⅿ期(2450年)頃、ⅿ期(2500年)頃、ⅿ期(2550年)頃、ⅿ期(2600年)頃、ⅿ期(2650年)頃、ⅿ期(2700年)頃、ⅿ期(2750年)頃、ⅿ期(2800年)頃、ⅿ期(2850年)頃、ⅿ期(2900年)頃、ⅿ期(2950年)頃、ⅿ期(3000年)頃、ⅿ期(3050年)頃、ⅿ期(3100年)頃、ⅿ期(3150年)頃、ⅿ期(3200年)頃、ⅿ期(3250年)頃、ⅿ期(3300年)頃、ⅿ期(3350年)頃、ⅿ期(3400年)頃、ⅿ期(3450年)頃、ⅿ期(3500年)頃、ⅿ期(3550年)頃、ⅿ期(3600年)頃、ⅿ期(3650年)頃、ⅿ期(3700年)頃、ⅿ期(3750年)頃、ⅿ期(3800年)頃、ⅿ期(3850年)頃、ⅿ期(3900年)頃、ⅿ期(3950年)頃、ⅿ期(4000年)頃、ⅿ期(4050年)頃、ⅿ期(4100年)頃、ⅿ期(4150年)頃、ⅿ期(4200年)頃、ⅿ期(4250年)頃、ⅿ期(4300年)頃、ⅿ期(4350年)頃、ⅿ期(4400年)頃、ⅿ期(4450年)頃、ⅿ期(4500年)頃、ⅿ期(4550年)頃、ⅿ期(4600年)頃、ⅿ期(4650年)頃、ⅿ期(4700年)頃、ⅿ期(4750年)頃、ⅿ期(4800年)頃、ⅿ期(4850年)頃、ⅿ期(4900年)頃、ⅿ期(4950年)頃、ⅿ期(5000年)頃、ⅿ期(5050年)頃、ⅿ期(5100年)頃、ⅿ期(5150年)頃、ⅿ期(5200年)頃、ⅿ期(5250年)頃、ⅿ期(5300年)頃、ⅿ期(5350年)頃、ⅿ期(5400年)頃、ⅿ期(5450年)頃、ⅿ期(5500年)頃、ⅿ期(5550年)頃、ⅿ期(5600年)頃、ⅿ期(5650年)頃、ⅿ期(5700年)頃、ⅿ期(5750年)頃、ⅿ期(5800年)頃、ⅿ期(5850年)頃、ⅿ期(5900年)頃、ⅿ期(5950年)頃、ⅿ期(6000年)頃、ⅿ期(6050年)頃、ⅿ期(6100年)頃、ⅿ期(6150年)頃、ⅿ期(6200年)頃、ⅿ期(6250年)頃、ⅿ期(6300年)頃、ⅿ期(6350年)頃、ⅿ期(6400年)頃、ⅿ期(6450年)頃、ⅿ期(6500年)頃、ⅿ期(6550年)頃、ⅿ期(6600年)頃、ⅿ期(6650年)頃、ⅿ期(6700年)頃、ⅿ期(6750年)頃、ⅿ期(6800年)頃、ⅿ期(6850年)頃、ⅿ期(6900年)頃、ⅿ期(6950年)頃、ⅿ期(7000年)頃、ⅿ期(7050年)頃、ⅿ期(7100年)頃、ⅿ期(7150年)頃、ⅿ期(7200年)頃、ⅿ期(7250年)頃、ⅿ期(7300年)頃、ⅿ期(7350年)頃、ⅿ期(7400年)頃、ⅿ期(7450年)頃、ⅿ期(7500年)頃、ⅿ期(7550年)頃、ⅿ期(7600年)頃、ⅿ期(7650年)頃、ⅿ期(7700年)頃、ⅿ期(7750年)頃、ⅿ期(7800年)頃、ⅿ期(7850年)頃、ⅿ期(7900年)頃、ⅿ期(7950年)頃、ⅿ期(8000年)頃、ⅿ期(8050年)頃、ⅿ期(8100年)頃、ⅿ期(8150年)頃、ⅿ期(8200年)頃、ⅿ期(8250年)頃、ⅿ期(8300年)頃、ⅿ期(8350年)頃、ⅿ期(8400年)頃、ⅿ期(8450年)頃、ⅿ期(8500年)頃、ⅿ期(8550年)頃、ⅿ期(8600年)頃、ⅿ期(8650年)頃、ⅿ期(8700年)頃、ⅿ期(8750年)頃、ⅿ期(8800年)頃、ⅿ期(8850年)頃、ⅿ期(8900年)頃、ⅿ期(8950年)頃、ⅿ期(9000年)頃、ⅿ期(9050年)頃、ⅿ期(9100年)頃、ⅿ期(9150年)頃、ⅿ期(9200年)頃、ⅿ期(9250年)頃、ⅿ期(9300年)頃、ⅿ期(9350年)頃、ⅿ期(9400年)頃、ⅿ期(9450年)頃、ⅿ期(9500年)頃、ⅿ期(9550年)頃、ⅿ期(9600年)頃、ⅿ期(9650年)頃、ⅿ期(9700年)頃、ⅿ期(9750年)頃、ⅿ期(9800年)頃、ⅿ期(9850年)頃、ⅿ期(9900年)頃、ⅿ期(9950年)頃、ⅿ期(10000年)頃、ⅿ期(10050年)頃、ⅿ期(10100年)頃、ⅿ期(10150年)頃、ⅿ期(10200年)頃、ⅿ期(10250年)頃、ⅿ期(10300年)頃、ⅿ期(10350年)頃、ⅿ期(10400年)頃、ⅿ期(10450年)頃、ⅿ期(10500年)頃、ⅿ期(10550年)頃、ⅿ期(10600年)頃、ⅿ期(10650年)頃、ⅿ期(10700年)頃、ⅿ期(10750年)頃、ⅿ期(10800年)頃、ⅿ期(10850年)頃、ⅿ期(10900年)頃、ⅿ期(10950年)頃、ⅿ期(11000年)頃、ⅿ期(11050年)頃、ⅿ期(11100年)頃、ⅿ期(11150年)頃、ⅿ期(11200年)頃、ⅿ期(11250年)頃、ⅿ期(11300年)頃、ⅿ期(11350年)頃、ⅿ期(11400年)頃、ⅿ期(11450年)頃、ⅿ期(11500年)頃、ⅿ期(11550年)頃、ⅿ期(11600年)頃、ⅿ期(11650年)頃、ⅿ期(11700年)頃、ⅿ期(11750年)頃、ⅿ期(11800年)頃、ⅿ期(11850年)頃、ⅿ期(11900年)頃、ⅿ期(11950年)頃、ⅿ期(12000年)頃、ⅿ期(12050年)頃、ⅿ期(12100年)頃、ⅿ期(12150年)頃、ⅿ期(12200年)頃、ⅿ期(12250年)頃、ⅿ期(12300年)頃、ⅿ期(12350年)頃、ⅿ期(12400年)頃、ⅿ期(12450年)頃、ⅿ期(12500年)頃、ⅿ期(12550年)頃、ⅿ期(12600年)頃、ⅿ期(12650年)頃、ⅿ期(12700年)頃、ⅿ期(12750年)頃、ⅿ期(12800年)頃、ⅿ期(12850年)頃、ⅿ期(12900年)頃、ⅿ期(12950年)頃、ⅿ期(13000年)頃、ⅿ期(13050年)頃、ⅿ期(13100年)頃、ⅿ期(13150年)頃、ⅿ期(13200年)頃、ⅿ期(13250年)頃、ⅿ期(13300年)頃、ⅿ期(13350年)頃、ⅿ期(13400年)頃、ⅿ期(13450年)頃、ⅿ期(13500年)頃、ⅿ期(13550年)頃、ⅿ期(13600年)頃、ⅿ期(13650年)頃、ⅿ期(13700年)頃、ⅿ期(13750年)頃、ⅿ期(13800年)頃、ⅿ期(13850年)頃、ⅿ期(13900年)頃、ⅿ期(13950年)頃、ⅿ期(14000年)頃、ⅿ期(14050年)頃、ⅿ期(14100年)頃、ⅿ期(14150年)頃、ⅿ期(14200年)頃、ⅿ期(14250年)頃、ⅿ期(14300年)頃、ⅿ期(14350年)頃、ⅿ期(14400年)頃、ⅿ期(14450年)頃、ⅿ期(14500年)頃、ⅿ期(14550年)頃、ⅿ期(14600年)頃、ⅿ期(14650年)頃、ⅿ期(14700年)頃、ⅿ期(14750年)頃、ⅿ期(14800年)頃、ⅿ期(14850年)頃、ⅿ期(14900年)頃、ⅿ期(14950年)頃、ⅿ期(15000年)頃、ⅿ期(15050年)頃、ⅿ期(15100年)頃、ⅿ期(15150年)頃、ⅿ期(15200年)頃、ⅿ期(15250年)頃、ⅿ期(15300年)頃、ⅿ期(15350年)頃、ⅿ期(15400年)頃、ⅿ期(15450年)頃、ⅿ期(15500年)頃、ⅿ期(15550年)頃、ⅿ期(15600年)頃、ⅿ期(15650年)頃、ⅿ期(15700年)頃、ⅿ期(15750年)頃、ⅿ期(15800年)頃、ⅿ期(15850年)頃、ⅿ期(15900年)頃、ⅿ期(15950年)

近江の銅鐸出土地

鐸群は、銅鐸祭祀の統合や弥生時代の終焉を
考えるうえで多くの問題を提起しています。

銅鐸祭祀の変貌

弥生時代の青銅器は、古くは近畿地方の「銅
鐸文化圏」と北部九州の「銅矛・銅剣文化圏」
の二大勢力を示すものと考えられてきました。
確かに古段階の銅鐸は、近畿地方の中でも摂
津北部、大和、河内、山城といった畿内を中
心に製作され、西は出雲・土佐、東は遠江ま
で広がっており、畿内中枢の勢力がその制覇
を広げるために銅鐸祭祀を普及させたと考え
られます。しかし、弥生時代中期後半を境に
様相は一変し、近年九州からも銅鐸が出土し
ます。また、製作にあたって土製の鋳型が採
用され、銅鐸の大型化と幾何学紋による装飾
化が進み、流水紋銅鐸の製作は激減し、絵画
銅鐸も減少します。銅鐸が複数出土する場合
も、弥生時代中期後半を境として前後の銅鐸
がともに出土することはありません。何より
も畿内を含む以西の地域では弥生時代中期後
半までに銅鐸祭祀が終わりを遂げ、その後は
畿内周辺域と東海地方に新しい銅鐸祭祀が広

がることになります。

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸

弥生時代後期になるとそれまで畿内を中心
に生産されていた幾つかの銅鐸製作集団が統
合されて、より大きく装飾的な銅鐸が生み出
されます。しかも銅鐸は近畿式と三遠式と呼
ぶ特徴的な二種類の銅鐸に大別され、近畿式
銅鐸は畿内の周辺部、特に摂津北部、紀伊西
部、近江、伊勢、尾張、三河、遠江等に分布
し、三遠式銅鐸は三河と遠江に偏った分布を
示します。

近畿式銅鐸の大きな特徴は、紐に双頭渦紋
とよぶ渦巻紋の飾耳を備え、鐸身の縦横帯内
を斜め格子紋で飾ります。三遠式銅鐸は、紐
に双頭渦紋がなく、身の区画は横帯が優先し、
横帯上には鱗まで伸びる太い軸突線を配しま
す。また、鱗や下辺横帯の鋸歯紋は内部の斜
線方向を交互ににかえ、横帯内の一部には綾
杉紋を採用します。その広がりをもっても確立
した三遠式銅鐸は三河と遠江に限って出土し、
やや変容した三遠系ともいえるべき銅鐸が、西
の近江や伊勢、尾張の一部から出土していま



飾耳を截断した近畿式銅鐸
1962年野洲町小篠原大岩山出土 4号銅鐸



三遠系銅鐸
1962年野洲町小篠原大岩山出土 9号銅鐸

す。このことから三遠式銅鐸は東海地方の拠点集落で造られていたと考えられます。更に三河と遠江の地域では近畿式、三遠式がともに出土しますが、複数が出土したものをみると近畿式は近畿式で、三遠式は三遠式で出土し、両者は地域の内部でも明確に区分されていたことがわかります。野洲町大岩山銅鐸群には、多数の近畿式銅鐸に三遠系銅鐸が少数含まれており、両者の特徴を兼ね備えた銅鐸も認められることなどから、広範囲の銅鐸が集められたとみられること、畿内と東海の勢力間に挟まれながらも独自の地域性を有していたことがうかがえます。

銅鐸祭祀の終焉

古段階の銅鐸は主に畿内で製作され、西域に分布していましたが、新段階になると大和や摂津のほか、近江（守山市服部遺跡、野洲

町下々塚遺跡）や尾張などの拠点集落からも土製の鋳型が出土しており、より広範囲に銅鐸生産が行われたことが明らかになってきました。また、高熱を操る技術者は銅鐸にとどまらず、銅剣や銅鏃、銅戈、ガラス勾玉など幅広い祭器の生産も担っていました。弥生時代後期、畿内はより東の地域に銅鐸祭祀を広めようとしませんが、畿内内部では、この段階にはほとんど銅鐸祭祀を行っておらず、周辺に青銅器製作技術者まで放出していることから、地域性を容認しながら新たな銅鐸祭祀を広めていったと考えられます。この新しい銅鐸のまつりはそれまでの稲作の豊穡を招く祭器にとどまらず、首長が地域を束ねる上で大きな効力を備えた祭器として用いられたのでしょう。

また、終末期の銅鐸に限り、細かく打ち砕かれた破片となって集落遺跡の縁辺や古墳時代の溝などから出土する例が増えています。しかもその多くが吊り手に付く近畿式銅鐸の飾耳であることから、近畿式銅鐸に限って銅鐸祭祀の終焉にあたり、破碎された可能性が考えられます。近江でも守山市下長遺跡から飾耳だけが古墳時代の溝から出土し、大岩山銅鐸の中にも故意に飾耳を截断したものが見受けられ、銅鐸の終焉には埋納という形のほかに破壊的行為を伴うまつりの否定を読み取ることができます。このように銅鐸祭祀からみた弥生社会崩壊の背景には、畿内が青銅器の原料供給を掌握していたこと、逸早く鏡に代表される新たな祭祀へと移行しつつあったこと、青銅器に加え新たに鉄器生産体制を確立しつつあったことなど、畿内勢力の先導による影響が大きく働いていたと考えられるのです。



最大銅鐸

1881年野洲町小篠原大岩山出土 東京国立博物館所蔵

滋賀文化財教室シリーズ No.188号

発行年月日 1999年12月15日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (077) 548-9780 FAX (077) 543-1525